

2018年5月31日  
 森林塾青水  
 事務局便り  
 茅風通信54号



上ノ原の野焼き

- 1月後半～5月の活動報告(事務局) .....1
- 第17回定期総会活動報告.....2
  - ◆新年度重点施策と活動計画・日程の概要
  - ◇セミナー 講師 青水顧問 高野 史郎
- 2017 定例活動⑨.....3
  - 「キャンドルナイト・雪原トレッキング報告」
  - ◆開催報告(草野洋)
  - ◇参加者レポート(谷 徹・藤川 あゆこ)
- 流域連携「小貝川と菅生沼の野焼き」活動報告.....5
  - ◆開催報告(草野洋)
- 2018 定例活動①.....5
  - 「春の風物詩・上ノ原茅場の野焼き」
  - ◆開催報告(草野洋)
  - ◇車座講座報告(稲貴夫)
  - 「火の文化と古代発火法」講師 関根 秀樹
  - ◇参加者レポート(井守 美穂・篠原 直登)
- 藤原現地報告(北山 郁人).....9
- 藤原の「ほっと」ショットコーナー(中村 智子).....10
- 協賛団体紹介「ホテルサンバード」(稲 貴夫).....11
- 野守のつぶやき(清水 英毅).....12

編集後記 (敬称略)

林リーダーほか数人がオブザーバー参加。

- 【1月】
- 20日、21日 小貝川、菅生沼で行われた野焼きに流域連携として各6名参加。
  - 1月25日 奥利根ダム水源地域ビジョン第2回懇親会に北山塾頭が出席。

- 【2月】
- 8日 「林業関係広報コンクール」①広報誌部門、②ホームページ部門に応募。(入賞に至らず)
  - 23日 新町長を草野塾長、北山塾頭が表敬訪問、塾の活動をアピール。

- 【3月】
- 10日、11日 定例プログラム「地域イベント・キャンドルナイト参加&雪原トレッキング」実施。15名(うち子供2)参加。キャンドルナイトはリーダー的な役割を担うなど大いに貢献。
  - 10日 増井幹事が、青水協力の下、大学院生として上ノ原で行った実証研究の一部を日本生態学会で発表。

- 【4月】
- 7日 第17回定期総会およびセミナー開催。会員数60名、参加24、委任状18、みなかみ町小

- 17日 国土審議会で取りまとめ中の「人口減少下の持続可能な国土の利用・管理のために」の国土計画事例集の中で、「都市住民と地域住民等が共同で茅場と森林を回復・維持・活用」として青水の活動が取り上げられる。
- 29日、30日 定例プログラム「春の風物詩・上ノ原茅草原の野焼」実施。43名参加、ほかにも行政機関、地元、消防団など多数のご参加、ご協力あり。雪が全くない状態のため、一部メンバーは前日からはいるなど、防火帯づくりに注力したかいもあり、2.1haを安全にかつ完全に燃焼。



- 【5月】
- 19日 麗澤中学校樹木観察会実施。青水会員をはじめ関係者15名がインストラクターとして参加し、1年生146名を体験指導。

(以上)

## ■第17回「定期総会」開催報告

### 事業計画をはじめ2018年度の方針が承認

森林塾青水の第17回定期総会を4月7日(土)午後一時より、東京都渋谷区の環境パートナーシップセミナースペースにおいて会員24名の参加のもと開催しました。議事に先立ち、草野塾長、続いてみな



塾長挨拶



みなかみ町小林GL挨拶

森林塾青水は、「飲水思源」「人と自然のほどよい関係」「継続はチカラそしてタカラを創る」の基本理念のもと、「自然の恵みを持続的に利用する仕組み」の構築と維持に取り組んできました。今年度も、上ノ原「入会の森」の茅草原、ミズナラ林とのほどほどの関係で保全と活用を図り、次世代につなげてゆくことを基本方針として、特に下記の点を重点目標において取り組んでゆく予定です。

- 都市住民、地元住民、行政との協力体制の再構築
- 古民家での茅刈合宿や町田工業との連携などによる茅の増産対策
- 流域団体や茅葺き現場の視察等、下流圏会員向け活動の企画
- 現地主導体制への橋渡しに向けた現地リーダーのバックアップ

役員選任では、浅川潔会員、米山正寛会員が幹事を退任し、尾島キヨ子会員が新たに幹事に就任しましたが、最後に新旧幹事よりそれぞれ挨拶。また、浅川会員の幹事退任に伴い、今年度は草野塾長が事務局長を兼任します。新年度の役員構成と事業計画は次の通りですので、引き続き皆さまのご理解とご支援をお願い致します。

## ◆今年度役員構成◆

### —塾長・塾頭・幹事・顧問・オブザーバー紹介—

#### 塾長

草野 洋 全般統轄 事務局長兼務

#### 塾頭

北山 郁人 全般統轄補佐・プログラム企画・みなかみ事務所長

#### 幹事

稲 貴夫 茅風通信、東京楽習会他(会計監査兼務)

岡田伊佐子 自然ふれあい学習他

尾島キヨ子 麗澤中樹木観察会/FW他

西村 大志 WEB管理、草原再生ネットワーク、草原サミット他

増井 太樹 草原再生ネットワーク、モニタリングサイト1000他

松澤 英喜 事務局長補佐、定例活動関連事務他

吉野 一幸 地元代表、NPO奥利根ネットワーク他

林部 良治 会計(年会費、経理統括)

#### 顧問

安楽勝彦 笹岡達男 滑志田隆 清水英毅  
高野史郎

#### オブザーバー/相談役

小林 勲 行政/みなかみ町役場窓口(エコ・パーク推進課)

林 親男 地元関係相談役(藤原案内人クラブ)

川端 英雄 アドバイザー

## ◆2018年度の主な活動計画・日程について◆

定例活動をはじめ各種行事のご案内は、開催日の約一カ月前を目途にホームページに掲載します。現在の予定は下記の通りです。

月	主な活動予定(定例活動・東京学習会・流域連携等)
4	総会&セミナー/7(土)
	定例活動①野焼き・山の口開き/29(日祝)・30(振休)
5	第12回全国草原サミット・シンポジウム
	定例活動②ミズナラ林の若返り、自然観察遊歩道開設/26(土)・27(日)
6	麗澤中学校樹木観察会/19(土)※下見12(土)
6	定例活動③土呂部草原/9(土)・10(日)
7	定例活動④防火帯刈払い/21(土)・22(日)
	学習会/萱葺屋根工事現場お手伝い
8	玉原高原トレッキング(下流圏会員親睦プログラム)/11(土)・12(日)

月	主な活動予定 (定例活動・東京学習会・流域連携等)
9	定例活動⑤ミズナラ林の若返り伐採・遊歩道延伸と諏訪神社例大祭/1(土)・2(日) 自然保護団体訪問・赤谷 22(土)・23(日)
10	定例活動⑥茅刈り(地域通貨茅ボッチ券発行・秋のお散歩マルシェ参加)/20(土)・21(日) 茅刈合宿(古民家合宿プラン)/18・19・22・23
11	定例活動⑦茅出し・山の口終い/17(土)・18(日)
12	学習会/未定
1	流域連携活動(菅生沼、小貝川野焼参加)/19(土)・20(日)
2	学集会/未定
3	定例活動⑧キャンドルナイト・雪原トレッキング/9(土)・10(日)
※上記の定例活動などに合わせて、車座講座、直売所訪問、外来種駆除、上ノ原ガイド作成等を実施 ※幹事会は各月第3火曜日の実施予定	

■総会セミナー 講師 高野 史郎(青水顧問)  
「目からウロコ、勘違いの自然観のあるある」

総会終了後のセミナーでは、当塾顧問の高野史郎氏よりお話をいただきました。

高野顧問にはちょうど三年前、2015年度の第一回東京学習会として、森林文化協会との共催により朝日新聞本社読者ホールで開催した一般公開のセミナーでもお話をいただきました。その時は、「スケッチ・オブ・ワンダー」と題して、植物画を介した植物にまつわるお話でしたが、今回は私たちが自然と触れ合う様々な場面に焦点をあてながら、まさに「目からウロコ」のお話しをいただきました。

その、「目からウロコ」を少し紹介すると、

- ①植物と昆虫との妖しい関係
- ②野鳥は、赤い実がお好き?
- ③総合学習・学び学習…… どうなった?
- ④和名・英名・学名一カタカナが多くて困る

などなどです。特に特定の植物を食べる野鳥や昆虫が、その目的のために植物との間に結んでいる関係は、まさに「妖しい」という表現がピッタリ。それに比べて、花粉症対策で人間がつくりだした「無花粉スギ」には、何となく切なさが感じられませんか、柔らかい語り口で問題も提起。「妖しい関係」だけが良いとは限りませんが、思い込みや勘違いで



おかしくなりつつある私たちの自然観の問題についても、多様な面から考えさせてくれるセミナーでした。  
(報告 稲)

2017 定例活動⑧

「キャンドルナイト&雪原トレッキング」  
報告 草野 洋

今年度の最後のプログラムは、15人が参加して3月10、11日に実施した藤原の地域おこしイベント「キャンドルナイト」設営の手伝いと参加、そして雪原トレッキングである。

天気が心配されたが初日から好天で、途中に見える谷川岳も青空に白く輝く雄峰を見せていた。藤原についてみると、年末の豪雪の印象から



かまくらにキャンドル棚をつくる

雪に埋もれた藤原のイメージと違い意外と雪が少ない。上ノ原では100cmぐらい、多いときは150cmはあるので野焼きまで雪が残ってればよいがと心配になる。



点灯したキャンドル

今年のキャンドルナイトの会場は宝台樹スキー場から藤原スキー場に移り雰囲気も変わったものとなった。早速、キャンドル設置のお手伝いだが天気は良くても風が強く寒い……。



プロジェクションマッピング

温度が低いせいか、粗悪品なのかチャッカマンがなかなか点火せずキャンドルに火を点けるのにひと苦労、右手の人差し指がしびれたようになってしまった。

この夜は氷点下、風もあって体感温度はマイナス5度ぐらい。イベントは、かまくらに火が灯る幻想的な中で、宝探し、ファイヤーダンス、花火はこれまでと同じであるが、夜店、プロジェクションマッピングは新しい仕掛けが会場を盛り上げていた。夜の交流会に初参加の大学の哲学の先生がおられて新鮮さもあって大盛り上がり。

2日目は、北山塾頭を筆頭に大幽洞までのカンジキトレッキング組9名(大学生3人が同行)、上ノ原雪中散策組5名に分かれての行動である。

今回はカンジキ組に小学2年生女兒と年長男児が参加した。大幽洞までの往復2時間、途中で帰って

くることも想定されたが二人とも無事踏破した。えらい！！

上ノ原組は、昨夜来の冷え込みで雪は堅く、カンジキなしでも自由に歩ける、この時季ならではの堅雪渡りができる。

白い茅場を自由に歩き、誰もていない雪原に自分の足跡を付けたり、雪の中にあおむけになったり、雪玉を作って転がしたり、至福の時間を過ごすことができた。



無事に大幽洞から帰還する



ホウノキの大きな冬芽と一緒に

## 舎西思原

谷 徹

今回はじめて雪中トレッキングに妻とともに参加させていただいた。その動機は、私が大幽洞窟の氷筈を見たいという以上に、それを見たがる妻を雪山で助けねばならなくなると思ったからだ。案の定、妻は滑落しかけ、北山さんの助力でやっと下山することができたが、かくいう私自身も滑落しかけた。何の役にも立たなかった。哲学者は役に立たないが、私がまさにその実例であることを知る川端さんからの依頼で、この拙文を認めている。

前夜の酒宴で、清水さんに「飲水思源」と書かれた掛け軸を見せていただいた。北周の詩人・瘞信の言葉だとか。皆さんはよくご存知だったが、私は知らなかった——哲学者は役に立たないだけでなく、知ももたない、だからこそ知を愛求するのだが。

哲学が求める森羅万象の「源」は、最初から知ることができない。知るには、後から振り返らねばならない。「源」という字の初文は「原」(厂+泉)で、「原理」といった語もこの語義に由来する。人は字源を忘れ、原理も忘れる。数学者は最初に原理を知ってから派生的な定理を知ろうとするかもしれない。しかし、原理・源は、派生的なものから振り返ってはじめて知ることができる。源の取り戻しこそ知の愛求である。

人は最初に源を思ってから水を飲むのではない。水を飲んでから振り返ってはじめて源を思うこともできる。この塾は古民家や草原(草原の「原」は当て字らしいが、それでも上ノ原の雪原に立つと「源」が感じられる)を回復させているとも聞いた。忘れられかけた源を振り返って取り戻そうとする活動だろう。人は、源から離れてしまうから、哲学的であらざるをえない。

「飲」の初文の「舎」は「酒」(酉)を含む。ならば「飲水思源」それ自体の源は「飲酒思源」(舎西思原?)だろう

か。酒宴で知れた飲水思源から我田引水してそんなことを思った次第である。いや、むしろ酔い痴れたのかも知れない。

## 10年ぶりの活動参加と人生初めての体験 藤川 あゆこ

2008年10月「茅刈り講習会&コンテスト」以来、ちょうど10年ぶりに森林塾青水の活動へ参加しました。今回は初めて「キャンドルナイトのお手伝いと翌日の大幽洞窟トレッキング」。半世紀近く生きていても、生まれて初めて体験するものがあるのは嬉しいもの。キャンドルナイト会場に作られたかまくらは、大人が立って入れる立派な大きさと、かわいいムーミンワールドがデザインされている。力作を壊さないよう、デザインがひき立つよう明りを灯したいと気づかしながらキャンドルをセッティングするものの、寒い！ホッカイロの暖かさが感じられない程に体が冷えてしまう。ムーミンもきっと寒いのだろうな。。。

今回、私が活動へ参加する引き金となったものは、数年ぶりとなる雪遊び。大幽洞窟トレッキングを楽しみにしていました。ふかふかの深い雪を期待して、スノーシューとトレッキングポールを持参したものの、雪は既に溶けて、量・パウダー感が共に少なく残念な状態。それでも子供を含め総勢12名のスノーシューを付けたトレッキング集団で大幽洞窟へ向かいました。大幽洞窟は生まれて初めて訪れる場所。名前から暗い洞窟の中を歩くとイメージしていましたが、予想外に狭い奥行きが現れました。ここでもムーミンワールドが存在し、透明な氷のニョロニョロをみることができました。ニョロニョロは、耳が聞こえなく、話さず、目もあまりみえない。食べる事や、眠る事もしない不思議な生き物。氷の透明さはニョロニョロの研ぎ澄まされた心を表しているかのような感じでした。



氷筈 今年は低温が続いたためか、大きさは控えめ？

メンバーにはこれが初めての山歩きや、雪山歩きという人も含まれ、道中ちょっとしたヒヤリハットもありました。幸いなことに大きな怪我もなく、全員無事下山できたのを確信した時に青空と谷川岳の綺麗な白い山を見ながら安堵感に浸り、春の訪れを感じました。小学生の参加者にとっては「今日の山歩きが人生で一番エキサイティングな体験だった」そうです。

**流域連携活動 小貝川・菅生沼の野焼き**  
**—貴重な植物資源を守るために—**  
**報告 草野 洋**

年も改まって大学入試センター試験明けの 2018 年1月20、21日と小貝川、菅生沼の河川敷の野焼きに塾から両日とも6名が参加しました。

塾がこの野焼きの参加することになったのは 2014 年からなので5年目、塾の流域連携活動、東京学習会（現地体験）として位置づけています。今回は初参加者2名が炎による自然保全を体験してもらいました。



参加者は小貝川堤防に集合



小貝川の燃え具合は？

びっしり生えたオギ、アシ、セイタカアワダチソウは枯草ですが光環境や富栄養化が影響し貴重な植物が生育する妨げになるので、焼き払って希少種の生育を助けます。かつては、優良なヨシなどを育てて利用するための暮らしの中で行われていた野焼きでしたが、今は、貴重な植物を守るため地域とボランティアの力で継続されているのです。

初日の小貝川は前夜のお湿りや植生の密度などが影響してか火を着けても大きな炎にならず、結局

は刈払機で焼け残りを刈る作業が多くなりました。

2日目の菅生沼は、乾燥具合も良く密度も濃く大きな炎が上がって参加者の歓声が上がっていました。

毎年、この活動に参加すると新たな出会いがあります。今年は日本植物園協会の方とお会



菅生沼ふれあい広場に集合



地上と地中の温度変化を説明

いできてお話を聞くことができました。野焼きによる動植物の保全というおなじみ目的を持って自然再生活動している団体との交流は自分たちの活動の意義を改めて確認するためにも有意義です。



大きな炎のあがる菅生沼の野焼き

**2018 定例活動① 野焼き実施報告**  
**—雪がなくても人の力と技術で克服—**  
**報告 草野 洋**

今年の奥利根藤原の冬は年末に記録的な積雪があったものの、その後降雪は少なく、春の訪れが早く季節が急速に進んだことから、野焼きを予定した4月下旬の上ノ原の茅場は雪のかけらもない状態となった。（右写真）

去年は残雪が多すぎて除雪に難儀し、面積も少なく気温が低く乾きが悪かったため、ススキの掻き起こしで何とか野焼きが出来た。そしてその前の2016年はやはり

積雪が少なく今年と同じ状態であった。その時、村の古老（故人）が言った次の言葉が印象的だった。

「おいら 84 年生きていたがこんな雪のない年ははじめてだ、おそらく 100 年ぶり？ ぐらいじゃなかっぺか」それからわずか2年してこの状況・・・。ご存命だったらどんな顔されただろう。それほど気候変動が激しいということだろう。気候など自然が通常の状態であれば人間生活に大きな影響を与えることになる。その分人間がチカラと知恵（技術）で克服しなければならない。今回の野焼きはそれを痛感させられた。

4月28日、晴天の中、オオヤマザクラやハナモモが一度に咲いて春真っ盛りが一番いい季節に藤原入りした8名（うち1人は小生の孫、草原デビュー）と北山塾頭は、上ノ原は雪が



雪のない上ノ原 後方は朝日岳



花盛りのオオヤマザクラ

なく、乾燥も激しいことを目のあたりにして今年の野焼きは万全の準備が必要であると自分たちに言い聞かせる。



草原を歩き回り区域標示



仮設防火帯の設置

まずは、野焼き予定地としているBブロックを踏査して、周囲常設防火帯に加えて仮設防火帯が必要であること、防火帯の可燃物のかき寄せを念入りに行うこ

とを確認した。本番は、Bブロック(約3ha)を仮設防火帯で4つに分割して行うことにした。面積は推定であるが①が0.7ha、②が0.9ha、③が0.4ha、④が0.3ha。(右図)

早速、常設防火帯と仮設防火帯の設置場所を孫に手伝ってもらいながら表示して刈払機で刈り払う。刈った跡は防火帯内の可燃物を焼却面に掻き込み、出来るだけ土を露出させる作業をしてもらう。その間、看板設置、作業指示、各種準備などで草原を飛び回る。その歩数、15,000歩(10km)。

この日の作業は、翌日の参加者分を残して終了。イベント初日、この日も晴天、気温が高く、湿度が低い上に風もあって不安が先に立つ。

参加者を待つ間、藤岡さん、駒井さん、孫は「遊棒パン」焼きのパン生地づくり(写真右)、他の方は、防火帯の刈り払いの手直し作業。レーキで可燃物の掻き込みを念入りに行う。



今回の野焼きの参加者は43名。役場、消防団、町田工業を含めると総勢55名。他に見学者が約10名。集合のあと広場の十二様に注連縄を廻らして山ノ口開き神事を執り行ない、一年間の作業の安全と良質の茅の生育を祈願する。

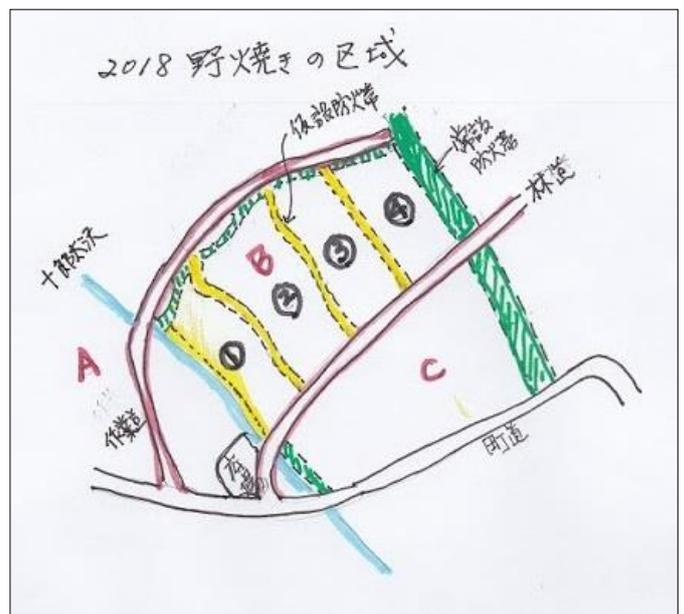


山之口開き神事

はじまりの式では、このような異常気象の下では参加者のチカラと知恵で安全な野焼きを行うべく全面協力をお願いし、スケジュールや作業手順、注意事項を書いた木製ホワイトボード「きえすぎくん」の前で説明、きえすぎくんも初登場であり参加者の注目を集めていた。



きえすぎくん登場 特殊コーティングした杉板で書き消し自由



野焼きの区域 黄色が仮設防火帯 ①から順番に火入れ

参加者に前泊組の指導のもと刈り払い機での防火帯切り、レーキで可燃物掻き寄せ作業を約2時間やってもらおうと、当初考えていた安全対策にはほぼ見通しがたった。

休憩を兼ねて一旦広場に集ってもらい、本日の「モグモグタイム」の「遊棒パン」焼きである。それぞれ作業中にとってきた棒にパン生地を撒き、好みに応じて桜の葉、ヨモギ、クルミ、ススキ若芽を生地の中に練り込んで焼く。クロモジの樹脂で練りあげた生地もあってそれぞれ風味が楽しめる嗜好となっている。参加者は炭



可燃物の掻き込み作業



大人に混じって少年も

火の周りを囲みパンを焼きながらお互いの紹介や参加の動機、作業のことなどを話し合っていた。これも「遊棒パン焼き」の効果である。

そのあと、4時30分の「作業止め」の笛を吹くまでの約1時間を、類焼の危険性の高い③の林縁部の防火帯切りと掻き寄せやってもらい、本日の作業を終了。相変わらず



日差しが強く、気温も高く、乾燥が激しい。この日の歩数は17,000歩(12km)

宿は、食事とサービスに定評の「おもてなしの宿」吉野屋さん。夕食後のもう一つの目玉「車座講座」は次項に掲載。

遊棒パンのモグモグタイム

さて本番の日、いやになるほどの好天気が不安を掻き立てるが、昨日の準備作業とみんなの団結で無事乗り切って見せると決意を新たにす。

上ノ原に着くと、昨日の作業と縞焼き法を結び付けて野焼の手順を「きえすぎくん」に図示して説明し、注意事項を伝える。

着火者を4人に絞り、15袋のジェットシューターを背負う人を西村さんが指名する。その前に、昨晚車座講座でお話しいただいた古代発火法の世界記録保持者、関根先生に火おこしを実演してもらい、3秒の技で採火し



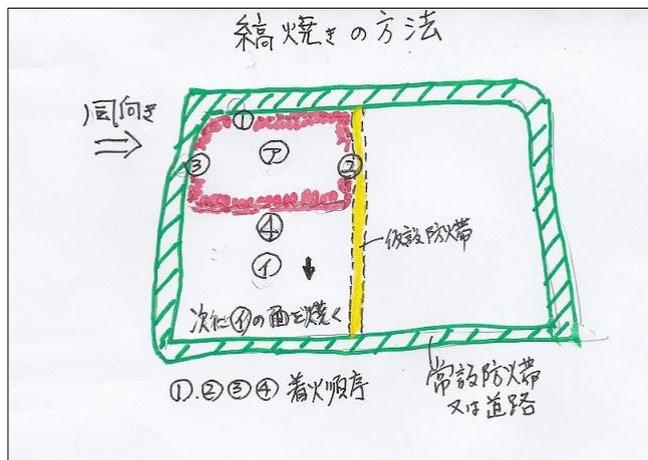
関根秀樹氏の古代発火法による着火

て野焼の火種とした。

9時30分①の区域から着火、乾燥は相変わらずだが幸いに風は山からの微風。

縞焼きは、斜面の上部の防火帯・仮設防火帯の縁から火を点けて防火帯の手前を焼き、防火帯を超えようとする火はジェットシューターで消す。三方の縁をある程度焼いたら下部を横方向に火を点けていき、その上部を一気に焼く、上からの火が燃え下がり、下からの火が燃え上がり、合体して焼き尽くして焼け跡が黒い縞になる。この時注意しなければならないのは横の縁を焼くときの風向きである。風下の方の縁を先にある程度焼き下ってから風上側の縁に火を点けることとジェットシューターの配置である。これを斜面下部方向に繰り返して、一つの区域を焼いたら次の区域に移る。野焼きの間、上空からドローンが撮影している。

②の区域を同じように焼き終わると①と②の黒い



縞焼きの方法 (イメージ図)



上 燃え盛る炎に備えるジェットシューター  
左 上からと下からの火が合体  
下 仮設防火帯が機能

斜面に挟まれて仮設防火帯だけが残っている風景が美しい。仮設防火帯をわざと曲線にしたのはこの風景を創りたかったからだ。



この間、消防団に防火帯に放水してもらおう。ジェットシューター隊は、途中で水が足りなくなり何度も補充に斜面を上り下し、相当疲れているようだ。

ジェットシューター隊の疲労と、風向きが里から山に変わり強くなったこと、それに残り時を考慮して③に着手した時、④の野焼きは取り止めることを決断した。そのあと全体を見回りジェットシューターで残火処理して鎮火宣言は11時50分、意外と時間がかかったが3区域2.1haが終了した。

終わりの式の最中に③の上部から煙が上がってジェットシューターが慌てて駆けつける一幕もあった

が無事に鎮火した。この日の歩数は9,000歩(6km)。

残火が心配だったので北山さんに時間をおいてもう一度見回りをお願いして藤原をあとにしたが17時30分ごろ何事もないとの連絡があり胸をなでおろす。

雪のない中での2回目の野焼きで教科書に書いてあるような縞焼き(写真右)



ができたことで、今後の雪のないときの野焼きの実施に自信となった。前泊者をはじめ参加者の皆さんの重労働にもかかわらずの奮闘、消防団の皆さんの頼もしいサポート、役場の送迎車の提供などの全面協力、そして津田先生、増井さん、小幡さんの豊富な経験に基づくアドバイスに助けられました。皆様に心から感謝申し上げます。

### 車座講座 「火の文化と古代発火法」 講師 関根秀樹さん

夕食後は本年度最初の「車座講座」を吉野屋の大広間で開催。講師は古代技術史・民族文化研究者である和光大学の関根秀樹さん。「火の文化と古代発火法」について、関根さんが再現した古代の発火具を実際に使いながらの楽しい講座となりました。野焼きを安全に、そして効果的に実施するには火の扱い方が大きな課題ですが、火の文化について、その根源を学習する有意義な機会ともなりました。講座の概要は以下の通りです。

○古代発火具の概要 キリモミ(錐揉み)式などの古代の発火具の形状や材質、使用法は、関根さんの師である科学・技術史研究者の岩城正夫氏が、実験を積み重ねながら復元・再発見し確立したものである。

古式の発火方法を継承しているとされる伊勢神宮や出雲大社が神事の中で行っている火鑽り(ひきり)は、儀式として相応しい形に道具が大型化し、アレンジされたものである。特に伊勢神宮のマイギリ(舞錐)は弥生時代からのものと言われたりするが、実際には江戸時代後期に伊勢ソロバンの穴開けに使用していた舞錐を転用したものである。戦後、登呂遺跡から火鑽臼が出土し、別の所から出た舞錐の横木の一部に似た形の木片が見つかった際、伊勢神宮の舞錐と同じ発火具が登呂遺跡で使われていたという解釈が、反論があったにも拘わらずメディアにも取り上げられて独り歩きしてしまったのである。



参加者も挑戦

○実演を交えながら キリモミ式で火種ができるまでの世界記録は、私と、学生時代の同級生が持っている3秒である。摩擦式発火法の要点は道具そのものにある。道具の大きさや材質、その形状と加工法に緻密な工夫がなされており、これらの条件を満たす発火具であれば誰でも火を起こすことができる。「電気もガスもない昔は火を起こすのも大変だった」というのは、現代人の勝手な固定観念にすぎない。

○火の神話 古代の発火法は日本の神話にも反映されている。イザナミは最後に火の神カグツチを生んだことにより火傷で死んでしまうが、これは摩擦式発火具の記憶とともに、利便性と危険性をあわせ持つ火の二面性を表現している。

○山火事の原因は失火と落雷 山火事の原因として、「木と木が風で擦り合わさって火が起き火事になることがある」という人がいるが、特に湿度の高い日本では、これで火がつくことは絶対にない。昔、宮城県のゴルフ場で、ゴルファーが誤ってアイアンで草むらの石をたたき、火打石のように火花が出て枯芝に点火し、火事になったことはある。

関根さんは古代の発火具だけでなく、ブリキ缶二つを糸電話のように長いばねで結んだ不思議な楽器アナラボス、回転させながら紐をもって振り回し風を切るような音を出すウナリ木、そして竹トンボなど、関根さん自作の楽器や遊具も準備いただき、それを実際に使ったの楽しいひと時となりました。また、関根さんはブルース・リーより速い、と言われたヌンチャクの名手です。実際に演じている姿は、「ぴよぴよヌンチャク」で検索してユーチューブをご覧ください。(文責 稲)



不思議な音の出るアナラボス

### 野焼きに参加して 井守 美穂

群馬・上ノ原で「森林塾青水」の野焼きに参加をさせて戴きました。今まで野鳥や花、昆虫などの姿や声を楽しませていただくばかりで、少しでもご恩返しが出来ないかなあとの思いからの参加です。

上毛高原駅から車で1時間程のところにある茅場に到着。山の神様に祈りを捧げた後、いくつかのブロック分けした茅場の境の部分の可燃物を寄せていく「防火帯」作りの作業。刈り取ってくれたカヤを巨大なフォークのようなレーキでかき寄せて、道を作るだけの作業なのに結構難しい。レーキを木の根に引っ掛けたり、かいたワラがレーキに絡まって収拾つかなくなったり、を繰り返しながらも何とか作業を進める事が出来ました。

休憩の時には焚火を起こして、木の棒にパン生地

を巻き付けて焼いたツイストパンがおやつ。夕方までかかって防火帯作りまでを終える事が出来ました。

夜は古代技術・民族文化研究家の関根秀樹先生に古代の火の起こし方を講義いただき、翌日の野焼き本番の着火も古代式に起こした火で行いました。先生がやると3秒で煙が立ち、麻縄に移して空気中で回すとすぐ炎が起き、驚きました。

ブロック分けした3か所に次々と点火、茅を焼いて行った火が防火帯まで来ると止まり、意外にも速いスピードで焼き尽くして鎮火。黒い焼け跡になりました。燃え盛る火と煙の勢いは少し怖いのもありましたが、神聖なものが感じられます。ここにまた小さな草が芽吹いて来て、広い野を好む生き物達の暮らしを支えていくのでしょうか。

作業の最中ずっとサンショウクイやモズ、オオルリの囀りが遠くから聞こえてきて気持ちの良い作業でした。

野焼き自体、1度見たことがあるだけで、何をどう作業するのかもまるっきり判らない状態での参加、防火帯を作って延焼を止める事にすら考えが及びませんでした。「森林塾青水」の方々が丁寧に説明を下さったおかげで無事に作業を進める事が出来ました。ツイストパン焼き、古代式の発火法も初めての事で楽しかったです。有り難うございました。また、参加したいと思います。

## 近くて熱い野焼き

篠原 直登

今回、友人に誘われ初めて上ノ原茅場での野焼きに参加しました。僕は大学院で半自然草地における植物と昆虫の関係について研究している学生で、野焼きをはじめとする人間の管理が草原性生物の保全のために重要であることを知っています。しかしそれ以上に、「野焼き」や学術論文でよく見る「Fire」という言葉は、魅力的でわくわくするような響きを持っていました。

都会で育った僕は、小さい頃から火を間近で見るといった経験が少なく、あってもストーブの中でちらちら踊る、あるいは花火のように人工的に作られた火を見るだけです。自然の中で火がどのような姿をするのかは、(僕の世代の人は)実はほとんど知らないのではないのでしょうか？今回の野焼きで特に印象的だったのが、そうした「本来の火の姿」を目の当たりにできたことです。

今回僕は、防火帯に立ちジェットシューターで延焼を防ぐという役割をさせていただきました。合図とともに目の前で次々と火がつけられ、枯れた茅は少しずつ燃えていきます。その火はジェットシューターで水を噴射すれば簡単に消えてしまいそうで、僕は若干手持ち無沙汰で眺めていました。

しかし次第に、枯れた枝や葉が燃えるパチパチという音が大きくなり、火の勢いが増してきました。僕は慌てて火の縁に向けて水を噴射しますが、目の前の火の大きさは僕が背中に背負っている水の量で

は太刀打ちできないように見えます。そのうちに風向きが変わり、火がこちらに大きくせりだすように姿を変えました。僕は数歩後ずさりすることを余儀なくされます。加えて、大量の煙が僕を襲い、僕はさらに数歩後退し、一旦戦線離脱をせざるを得ませんでした…

こんな風に、目の前まで迫ってくる火を目の当たりにし、顔が焼けそうになるほどの熱を感じたのは、まさに今回が初めてでとても印象に残っているシーンです。さらに、一見焼け野原になったように見える茅場も、灰の下では次の植物が芽を出す順番を待っていると聞きました。今後は、火のダイナミックな姿に加えて、新たな植物種の成長という生態系のダイナミクスを目の当たりにできるんじゃないかと楽しみにしています。

## 藤原現地事務所報告

「森のようちえん」の試み

北山 郁人

藤原には、5年前までみなかみ町立第三保育園がありました。現在は園児が減ったため休園となっています。ここ数年また、子どもたちが増えてきたこともあり、町に開園の願いをしてみました。建物が老朽化していることもあり、なかなか再開するめどが立たちませんでした。そこで、認可外の保育所でもいいので、人件費と運営費を町から補助してほしいとお願いしたところ、議会でも承認され、30年度から運営ができるようになりました。そして、ちょうどアメリカから移住希望の家族の奥さんが保育士という幸運にも恵まれ、この方を中心に保育所の準備を進めています。どうせやるなら、藤原の自然を活かした「森のようちえん」のような形でやりたいと思っています。拠点は、民宿関ヶ原の母屋を借りて、名称は、「森のようちえん でこでこでん」に決まりました。



今、「森のようちえん」という活動は全国でも拡がりを見せていて、子どもに自然のなかでいろいろな体験をさせたいという想いを持った保護者も増えています。森といっても自然体験ができる場所(里山、畑、川、公園などのこと)をさし、ようちえんといっても、幼稚園、保育園、自主保育、託児所…など多要素を含んだ少し新しい取り組みです。現在日本では多種多様な「森のようちえん」の形態がありますが、藤原の豊かな自然のなかで地域の人々との繋がりを大切にして、子どもたちの成長を見守ることができたらいいなと思っています。



■藤原の”ほっと”ショット・コーナー⑮  
中村 智子

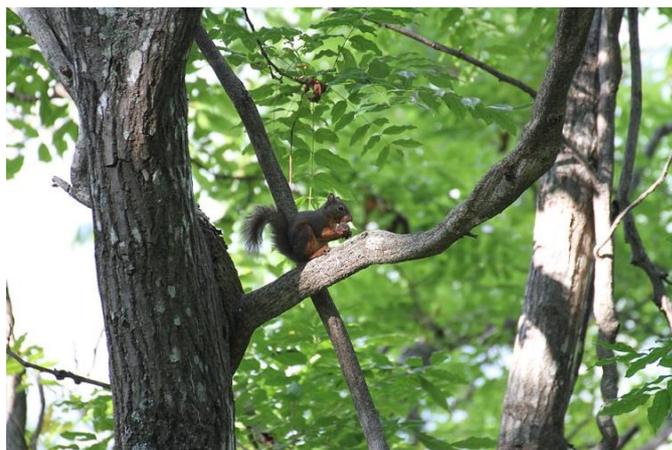
地元・中村智子さんの、“ホット”ショット・コーナーです。今号では、可愛らしいニホンリスの1年の様子を編集していただきました。(編集子)



2月ごろ、冬眠しないので、雪の中を飛び回っています。



5月、夏毛になってきました。



9月下旬、そろそろ、クルミがなりだしました。



2月下旬、リスのカップルがいました。



10月下旬、紅葉してきました。まだ、夏毛です。



4月下旬、リスの親子です。子リスを銜えて散歩？中です。



12月、冬毛になってきました。

## ■協賛団体紹介(第6回)

### 「ホテルサンバード」

稲 貴夫

森林塾青水の協賛会員として様々な形でご協力をいただいている企業や団体を紹介するコーナーです。第6回目は、ホテルサンバードです。

昭和56年創業の「ホテルサンバード」は、藤原スキー場を併設するとともに、奥利根温泉郷の醍醐味も満喫できるホテルです。二代目の松本亨太社長は、2歳のときから藤原で暮らし、一般企業の勤務を経てから先代の後を継ぎ、9年前に社長に就任した青年実業家です。ホテルの特徴や経営方針などについて、お話しをお伺いしました。



ホテルサンバードの外観

観光道路)の美しさが忘れられず命名したとのこと。これで長年の謎が解けた感じです。

ホテルの特徴は温泉とスキーです。大浴場のほかに、「翠どころの湯」や「癒しの湯」、はたまた「酒樽の湯」など、それぞれ名前のついた11種類の貸切露天風呂“温泉道楽”は家族連れに大好評です。温泉を満喫したあとは、地元で採れた季節の食材をふんだんに使用した美味しい食事が待っているのですから。また、離れの高台にある露天風呂「百景花」



貸切露天風呂「酒樽の湯」



ホテル直結の藤原スキー場

ホテル名のサンバード。ホテルを創業した松本社長の先代は長野県戸隠の出身。陽光が降り注ぎ、輝いて見えたバードライン(長野市と戸隠高原を結ぶ

谷川連峰や滝を眺めながら秘湯奥利根温泉を堪能できます(ホテルからシャトルバスで送迎、冬季は利用不可)。

宿泊は、通常のホテル泊だけでなく、敷地内の白樺キャンプ場でテント泊を体験できるコースもあります。また、自炊が基本で30人まで宿泊できる別館は、人

数がまとまれば宿泊料金も割安で、合宿などに適した施設です。

しかし、サンバードの最大の魅力は、松本代表がこだわる経営理念そのものにあるでしょう。

社員とともに生み出したその理念は、「自然と笑顔に」で、大切な三つの視点があります。

①宿泊客に自然を通じて心からの笑顔を生み出す。

②働く人たちが心から笑顔になる環境をつくる。

③地域の人々が一緒に笑顔になれる循環をつくる。

これらの理念が、社員の採用、教育からサービス、地域との連携にいたるまで、様々な場面での道標となり実行されていることが、最大の魅力なのです。

その実例の一つに、地元の事業者や農家と立ち上げた「みなかみ町体験旅行」があります。町の各所に点在するアウトドアや農林業、工芸などの様々な体験の場を都会の学校に開放し、民泊も含めてコーディネートするのがその役割です。それらをホテル泊と組み合わせることで、体験プログラムを提供するみなかみ町全体と一体となり取り組めるようになったとのこと。まさに、③の理念の成果と言えます。

また、奥利根水源地域ネットワークが主催しているキャンドルナイトは、今年は「藤原雪まつり」として藤原スキー場で開催され、ホテル直結のゲレンデは青水のメンバーが設置したキャンドルやデジタル掛軸で彩られました。

雪が解けたゲレンデには、これから様々な草花が咲き誇り、秋には100万本のコスモス園となります。

「飲水思源」を旗印に利根川流域の共生を目指す青水とも理念が共通するホテルサンバード。上ノ原での体験活動でコラボできる日が楽しみです。



白樺キャンプ場



30人収容の別館



藤原雪まつり

水上高原・奥利根温泉 ホテルサンバード  
所在地 〒379-1721 群馬県利根郡みなかみ町  
藤原 4957  
TEL:0278-75-2321/Fax:0278-75-2105  
URL : <https://hotel-sunbird.com/>

## ■野守のつづき(13)

～ 初めて尽くしの「野焼き」；余話

### ●『万緑叢中紅点々』！ 4月29日、野焼き前日。



王安石「咏石榴」に『万緑叢中紅一点』という行があると教えて下さったのは高野顧問。紅一点はザクロ、季節は夏。ところで

今春の野焼き行では、藤原集落のあちこちの山間で山桜の花姿を見かけた。十郎太沢沿いの溪合(標高1,100 前後)にも、大山桜が点々と薄紅の楚々たる姿を見せてくれていた。こちらは『万緑叢中紅点々』といった風情にて、まことに心地良く陶然とさせられた。例年なら、上ノ原の山桜たちの開花は連休明けのこと。地球温暖化に感謝してよいものかどうか？！

### ●初めて“自前の野焼き” 4月30日、野焼き当日。

地元の先輩方と町役場のご指導・協力のもと、40年ぶりの野焼きを再開したのは2004年。あれから14年。今年



は地元古老衆のお力を借りることが困難となった状況下、町役場と地元消防団の出動を仰ぎつつも、残雪に頼ることなく自力・自前かつ無事に完了。小貝川や菅生沼の野焼きに参画・交流しつつ学んできた「縞焼き方式」。その実践のため、夏場から数次にわたる防火帯伐り。草野塾長以下総員の努力と汗の結晶であり、正にエポックメイキングな事。謹んで十二神様にご報告！



塾発足当初から現代版入会の構築を模索しつつ積み重ねてきた利根川流域NP O各団体との交流活動の成果であり、ゆるやかな「流域コモンズ」の形成につなが

るものと夢が膨らむ。あらためて『飲水思源』、長きにわたりご指導いただいた地元長老衆並びに縞焼きの先達たる小幡・西廣・津田の諸先生方に深く感謝。

### ●イベント案内に野焼！

30日夜は「吉野屋」に後泊。風呂も食堂も独り占めの贅沢。ゆとりがあったせいか翌朝、嬉しいモノが目



ンター上に宿泊客向けイベント案内ボードがあって、そのトップに野焼きが載っているではないか！(写真左下→上から2行目) また百合子ママに聞くと、最近はスキー客以外も増えてガイドマップ「藤原田園空間博物館」(2014年3月改訂版)も不足気味にて 50 部ほど追加、できれば英語版が欲しい、と。嬉しい悲鳴！

### ●末黒野の上ノ原を満喫 5月1日、野焼き翌日。

純一グランパの軽トラで上ノ原へ。まずは、ニセアカシアの根伐り。今年は3本、根競べは未だ続く。次は草木塔(愛称「十郎太さま」)のお世話。かねて用意のツルウメモドキ製首飾りを巻いて差し上げる。少し登って、ヤマハンノキの根回りの刈払い。見晴台兼休憩処にピッタリの位置だ。炭窯広場では腰掛石周りの刈払い、計10基。



握り飯で一服。遠く十郎太沢の響きに混じって小鳥たちの囀り。ウグイスの初鳴きも。見下ろせば、縞焼き状の末黒野がなだらかに広がり、まるで桃源郷。3日連続の薫風に感謝。

●広場で凧揚げに興ずるファミリー 聞けば、遠路はるばる国分寺市からご来遊の由。末黒野の写真を撮るご夫婦や水汲みの人達にも出会った。みなかみ町ユネスコエコパークでは、上ノ原は人が行き交う里山＝移行地域という位置づけ。当塾関係者のみならず、広く流域の首都圏住民が関心を持ち楽しんでいただけるのは嬉しいこと。



野を焼くやすみれの小花おちこちに 青水

平成30年幸月(青)

### ～編集後記～

『茅風通信』第54号をお届けします。今年の野焼きは残雪のない中、参加者全員が一致協力、無事に目的を達成することができました。気象条件に左右される野焼きは、雨が降れば火は着かず、風が強く乾燥しては火をつけることができません。その判断を誤ると危険です。最近では都会では焚火も出来なくなり、火の文化は周辺から消え去りましたが、関根秀樹さんの車座講座では、古代発火法を通して火との根源的関わりを追体験することができました。上ノ原の野焼きは、我々が考えている以上に深く大切な意味があるのではないかと、気づかされました。(稲)